

氏名（本籍）	小中 大地
学位の種類	博士（デザイン学）
学位記番号	博甲第 9915 号
学位授与年月	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	造形活動を伴うコミュニケーション型アートに関する研究 —病院や地域との連携によるゴブリン制作活動の実践から—
主査	筑波大学教授 博士（芸術学） 直江 俊雄
副査	筑波大学教授 博士（芸術学） 石崎 和宏
副査	筑波大学教授 博士（デザイン学） 田中 佐代子
副査	筑波大学教授 博士（農学） 黒田 乃生

論文の内容の要旨

小中大地氏の博士学位論文は、造形活動を伴うコミュニケーション型アートの様々な特質を関連文献の調査によって明らかにしたものである。そして造形活動を伴うコミュニケーション型アートを豊かな活動として行うための在り方を共有可能なものにするための課題について、著者による病院や地域におけるアート活動を省察することで明らかにしたものである。本論文の要旨は以下のとおりである。

本論文は序章と終章を含め 7 つの章から構成されている。

序章において著者は、研究の背景、目的、位置づけ、研究対象と方法について述べている。コミュニケーション型アートとは、人と人とのコミュニケーションを重視するアート活動である。著者はアーティストとして「ゴブリン」（身の回りの様々な物や事柄をテーマとして顔のある生き物の形態をした造形作品）を制作する活動を伴うコミュニケーション型アートを、2005 年から継続的に実施していることから本研究課題に着目したことについて述べている。また前提としてコミュニケーション型アートは、アートプロジェクトのひとつの制作形態であることについて述べている。さらに本研究の目的は、1) 造形活動を伴うコミュニケーション型アートの様々な特質を明らかにし、2) 造形活動を伴うコミュニケーション型アートを豊かな活動として行うための在り方を共有可能なものとすることであると述べている。この「豊かな活動」として行うための指標として、本来の芸術の力が消えてしまわないようにすることと、参加者・不参加者への想像力が欠如しないようにすることと設定している。研究方法としては、目的 1) は関連文献を調査対象として分析し、目的 2) については 2005 年 8 月からのゴブリン制作活動を「芸術的省察による研究（Arts-Based Research）」という考え方を参考にして考察している。

第1章において著者は、主に国内で実施されたアートプロジェクトに関連する文献資料を調査している。そしてコミュニケーション型アートの定義を、背景、内容、期待される効果といった観点から提示している。またコミュニケーション型アートの様式が出現した時期と、用語自体が現れ始めた時期は、どちらもアートプロジェクトと同様の1990年代であることを明らかにしている。

第2章において著者は、アートプロジェクトに関連する文献資料を調査し、国内を中心としたアートプロジェクト史を概観している。そしてコミュニケーション型アートの変遷について考察している。またそれらの文献資料から抽出したコミュニケーション型アートの事例を調査し、それらを枠組み、役割、参加方法・内容といった観点ごとに分類している。

第3章において著者は、ゴブリン制作活動の全体像を示している。まずはゴブリン制作活動の協働面における特徴と、コミュニケーション型アートにおける位置づけについて述べている。次にゴブリン制作活動を構成する要素について、「場」「時間」「関係する人々」「作品-造形の側面から」「作品-コミュニケーションの側面から」といった視点から述べている。

第4章、第5章において著者は、著者が病院や地域と連携して展開したそれぞれのゴブリン制作活動について具体的に述べている。さらに著者が各活動において体験したコミュニケーションに関するエピソードを「芸術的省察による研究 (Arts-Based Research)」という考え方を参考にして省察し、豊かな活動として行うための在り方を考察している。

終章において著者は、各章で得られた知見と成果をまとめ、第1章で提示した定義に加筆して再提示し、造形活動を伴うコミュニケーション型アートの特質としてまとめている。また造形活動を伴うコミュニケーション型アートを豊かな活動として行うための共有可能な在り方として、参加者・不参加者に寄り添えるアーティストの存在が重要であることを、結論として述べている。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究はこれまで十分に検証されていなかった造形活動を伴うコミュニケーション型アートについて、関連する文献資料を適切に用いて分析を行っており、その特質を明らかにしたものであり、調査方法には妥当性がある。そして著者によるこれまでの造形活動を伴うコミュニケーション型アート活動について述べ、著者が体験したコミュニケーションに関するエピソードを省察することで、豊かな活動として行うための在り方を考察した点において、独自性と学術的意義がある。本論を構成する骨子は、『芸術学研究』の査読付き論文2編として採用されており、学術的価値も認められている。本研究で得られた有効な知見は、今後の国内外におけるアートプロジェクトやコミュニケーション型アート活動の実践や研究に寄与する発展が期待できる。

令和3年1月27日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(デザイン学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。